信仰がなくては

「ヘブル人への手紙」11 章 1～6 節までを朗読。

6 節「**信仰がなくては、神に喜ばれることはできない。なぜなら、神に来る者は、神のいますことと、ご自身を求める者に報いて下さることとを、必ず信じるはずだからである**」。

新しい年（2019 年）を迎え、この年、どういうことが起こるか、皆目見当つきませんが、きっといいことがあるに違いないと、多くの人は夢を抱いて、新しい年を始めました。そういう時に、私たちの信仰とはそもそも何なのか、しっかりと押さえておきたいと思います。信仰という言葉を繰り返し使いますが、信仰とは何かと言われると、神様を信じることだと答えます。神様を信じることが信仰であると。ところが、神様という言葉は漠然として、つかみどころがない。神様という方はどういうお方か。創造の神、万物を創造なさった神様であると言います。それからまた、神様は全能者でいらっしゃる。神様はどんな事でもなし得る、力あるお方。一番力あるお方といえば、神様だと答えます。神様は力あるお方で、全能者であると。また、神様は目に見えないけれども、どこにでもいらっしゃる。どんなところにでも神様はいらっしゃる。その結果、日本は、八百万（やおよろず）の神と言われるくらいに、あちらこちらに神がいる。

信州に安曇野という風光明媚な所があります。そこは、田んぼばかりで、遠くに高い山が連なって、白い雪をかぶって、景色がいい所です。そこは田舎のあぜ道にお地蔵さんというか、小さな像、道祖神が祀られています。また町の中にもあります。街角の、ちょっとした所に祠（ほこら）がある。そこに石像が置いてある。それが至る所にあります。どこにでも神様がいらっしゃる。私たちが神様を信じるとは、どうすることなのか。そのことがここに語られています。6 節に「**信仰がなくては、神に喜ばれることはできない**」です。神様を信じなかったなら、神様から喜ばれない。どんな善行功徳を積もうと、あるいは世のため、人のために、自己犠牲をしようと、信仰がなくては、神に喜ばれることはできません。では、その信仰とは何か。その後に、「**なぜなら**」とありますが、理由というより、むしろ、神に喜ばれる信仰が何なのかということです。

言われていることが二つあります。一つは、神のいますこと、これです。神様がいらっしゃること。先程申し上げましたように、神様はいろいろな力を持っている。いろいろな性質がある方。全能者である、創造の神である、あるいは、愛の神。また、すべての所におられる神様。いろいろな性質があります。何よりも、私たちが求められていること、信仰の中心点、土台は、神様がいますということです。

神様のご性質がどのようなものであろうと、聖書が最初に私たちに語っているのは、まず「神様がいます」という、この一点です。旧約聖書の創世記 1 章 1 節

の御言葉に、「**はじめに神は天と地とを創造された**」と。言い換えると、天と地が創造されなかった、何もなかった時に、神様がおられた。これが聖書を貫いている、大切な信仰の土台です。神がおられた。そして、神様によって、すべてのものは造り出され、生かされ、持ち運ばれて、今ここにある。私たちも、今日、こうして健康が与えられて、生きる者とされた。「私が元気だから」「親からもらったこの体力があるから。だから、今日も生きておられる」、それは間違いです。神様がおられるから、私がある。常に、ここに、私たちの信仰の原点を置いていかないと、いろいろな事で迷います。私たちが、今日、ここに生かされて、今日もこうやってここに集うことができたのも、神様がおられるゆえです。私が昨日から準備してきた、あるいは、今日は週の初めの日、安息日、聖日だから、礼拝に行くと決めて来たから、ここにいるのではなく、神様がいますゆえに、私たちはここにある。神あり、ゆえに我ありなのです。この原点を、どんな事の中にも貫いていくこと、これが信仰に生きることです。神様がおられるから、今ここに私もいます。

だから、世間の人は「神様はどこにいるのだ。見えないじゃないか。見せてくれ」と屁理屈を言いますが、そういう時、皆さんは何と答えるか。一生懸命考えて、聖書の言葉をひねくり回して、神様はこういう方だと言いますが、相手は納得しない。しかし、その答えは実に簡単な事です。それは何か。「私を見てくれ」ということです。私が今ここに生きているのは、神様がいらっしゃるからであって、神様がいらっしゃらなければ、私はないのです。「**はじめに神は天と地とを創造された**」。すべてに先立って神様がおられた。それはいつからかわかりません。しかし、森羅万象、天地万物が始まるのは、神様がいらっしゃったから始まっている。だから、神様がいらっしゃらないと言うのなら、私たちは誰一人ここに存在しないのです。神様がおられるからこそ、私たちはここにこうして生かされている。神様が造って下さったから、創造の神がいらっしゃるから、私たち一人一人に生きる命を与え、健康を与え、食べる糧を与え、日を照らし、雨を降らせ、着る物を与え、神様が養って下さる。それゆえ、私たちは今ここに存在している。あらしめていただいている。これが信仰の最も大切なことです。

6 節「**信仰がなくては、神に喜ばれることはできない**」と、まさにその通り。信仰の第一は何か。神に来る者、すなわち神を信じる者は、神様のいますことを信じる。そして、神様は全能者であり、創造の主であり、またいつでもどこでも、絶えず共にいて下さる、霊的な、霊なる神ご自身でいらっしゃる。そればかりか、私たちを造るにあたって、神様は愛なるお方、神様は私たちを大切な、ご自分に最も近い者として、お造りになった方でいらっしゃる。

ですから、神様が人をお造りになった時、神様に似たものとして私たちを造っ

てくださった。その後に、もう一度、言い換えられたのは、命の息をその鼻から吹き入れて、人は生きる者とされた。言うならば、神のかたち、尊い神様の姿に近い者として造って下さった。近いというか、ほとんど同じように、です。そして神様と同じ命を分かちあう者として、人を造って下さった。神様と共にあるということ、これが人の造られた目的であります。「伝道の書」に、「**事の帰する所は、すべて言われた。すなわち、神を恐れ、その命令を守れ。これはすべての人の本分である**」(伝道 12:13)とあります。人が人たる値打ち、価値、それはどこにあるのか。それは神様と共にあること以外にない。神様が私を造り、私を生かしていらっしゃる。神様は造るにあたって、私たち一人一人を、神様の尊い姿に似る者、神様に近い者として下さった。

詩篇 8 篇に、「**少しく人を神より低く造って**」(5)、そして私たちを顧みて下さる。「**人の子は何者なので、これを顧みられるのですか**」。神様が私たちを顧みておられるのは、何ゆえか。それはただ一つ。神に最も近い者。といっても、神になるわけではありません。神様とは全く違うものです。神様は創造者であり、私たちは被造物。造られたもの。この関係は決して壊れません。これを越えることはできません。しかし、神様のほうが、私たちに近づいて下さって、その証しとして、人を神のかたちに似た者と造り、神様と同じ命を分かち合う者として造って下さった。私たちのうちに、神様の霊が宿る者として下さったのです。これが“神います”ということの証しです。

私が今日、ここに生かされていること自体が、これは神様がおられるからに他ならない。神様がいらっしゃらなかったら、ありとあらゆるもの、何もありません。「創世記」のはじめに、この世は混沌として、やみがおもてをおおっていた。何もなかった。ところが、今、私たちがこうやって、神様によって造られ、神様に最も近い者として、神様と共に生きる者として、神様に造られながら、私たちは神様を離れてしまった。神様の恵みを失って、命を絶たれてしまうのです。命を絶たれたと言っても、肉体の命はありますが、たましいの命、内なる命、神様から分け与えられていた永遠の命が、消えてしまった。死んだ状態であります。ですから、私たちのことを「**罪ととがとに死んだ者**」とパウロは語っています。死んだのです。全く腐敗した存在になってしまったのが、人の姿であります。その私たちを、もう一度、生きる命につないで下さったのが、主イエス・キリストのことです。

6 節に「**信仰がなくては、神に喜ばれることはできない**」。なぜなら、神に来る者は、神様を信じる者は、神のいますこと、そしてその神のいますことというのは、その大前提が、私たち一人一人が神によって造られ、神様の尊い命を分かち合った、最も神様に近い者として造って下さった。神様のいますことを信じるとは、そのことです。そして、神様は、私たちを造って、それきりにして、そのま

まほったらかしにしたというのではなく、神様は、私たちに、今も絶えず干渉して下さる。関わって下さる。神様に背いて、人はエデンの園から追放され、神様との関係が断たれます。罪ととがとに死んでしまって、そこには喜びも、望みも、感謝もない。平安も失いました。人は罪ととがとに死んだものとなり、様々な悪しきサタンの力に支配されて、神に敵対する存在に変わって行ってしまいました。

だから「ローマ人への手紙」にあるように、「**義人はいない、ひとりもいない**」(3:10)と。すべてのものは悪に染まってしまって、罪ととがとに死んで、何一つ見るべきものがない。腐敗と、悪臭に包まれた人の世界。まさに今、私たちが住んでいるこの世界は、そういう世界です。しかし、そういう私たちを、神様は放っていらっしゃるのではなく、それでもなお、神様は、私たちをあわれんで生きる者として下さる。力を与えて下さる。食べる糧を与え、着る物を与え、雨を降らせる。イエス様はそうおっしゃいます。神様は、恵み豊かなお方であって、罪人にも、そうでない人にも、正しい人にも、正しくない人にも、等しく陽を照らし、雨を降らし、食べる糧を与え、着る物を与えているではないか。まことにその通り。神様がどんなにあわれみ深いお方であるか。神様のことを顧みようとしない、身勝手な生活をしている人にすらも、神様はなお、愛を注いで下さる。そればかりか、神様は、私たちの罪の贖いとして、尊いご自身のひとり子をこの世にまで遣わし、あの十字架に命を絶って下さった。それは今、私たちが信じて、罪を赦され、感謝して、神様のもの、神様の子供とされたと喜んでいます。しかし、今も罪の中に、罪ととがとに死んだ状態になっている人たちのことを神様は忘れているのかと言うと、そうではなく、その人たちがまだ気づかないのであって、実は、その人のためにもキリストは命を捨てて下さったのです。

時々、そういうことを言います。私たちは幸いにあわれみを受けて、この救いにあずかって、天国の約束を与えられ、永遠の御国を継ぐ者とされました。でも、「私の友達のあの人にいくら話しても聞いてくれない。先生、あの人は地獄に行くのでしょうか。あるいは、私の先祖は、イエス様のことを聞かずに死んでしまったが、どうなるのでしょうか」と。イエス様は、その人のためにも十字架にかかって、命を捨てて下さったのです。私たちが、「あの人はいくら言っても、イエス様の救いのことを聞こうともしない。あれはもう滅び。あの人は地獄」と、こっちが決めている。人がさばく。イエス様はそうではない。その人のためにも、わたしは命を捨てたと言われるのです。

イエス様の十字架の贖いは、完全な贖い、全き贖いです。そこには私たちの罪ばかりでなく、すべての人のために、イエス様は十字架に死んで下さった。それなら、「イエス様を知らずに死んでしまった先祖たちもイエス様の救いにあずかったのでしょうか」。「あなたはどう信じますか」。「いや、ぜひあずかってほしい」

と思う。イエス様の十字架の血潮がそこにまで届いていると、あなたが信じるならば、救われる。あなたが信じなければ、それは届かない。あなたはどちらを信じるのか。神様のわざは実に奥深い。私たちの浅はかな知恵で測り知れない。イエス様はよみにまで下って、主の救いを伝えて下さった。すべての人が救われるようにと、神様は待ち望んでいて下さる。神様はなんと心広い、恵み豊かなお方であるか。そして、今、私たちの日々の生活で、どれほど神様を大切にしているか。振り返ってみると、まことに心もとない。24 時間 365 日、これだけの時間と日がありながらも、神様に向ける心は何分何秒。一時間足らずかもしれない。そういうまことに忘れやすい、忘恩の者でありながらも、神様は片時も忘れることなく、私たちに絶えず干渉して下さる。私たちを造り出して下さった神様は、とことんその面倒を見て下さる。たとえ、私たちがひどい罪を犯した者であろうと、神様は「わたしはあなたを見捨てない」と、常に私たちのうちに奇しきわざをすすめて下さる。日々の生活に起こる一つ一つの出来事も、どれ一つ、神様によらないものはない。「神様のいますことを信じる」ことは、とりもなおさず、私がここに生かされていることも、その証しであり、また同時に、地上の日々の生活の良いことも悪いことも、嬉しいことも悲しいことも、楽しいこともそうでないことも、どれもこれも、この神様によらないものは、何もないのです。

ところが、私たちは神様を忘れる。あの人がしたから、こうなった。私が頑張って、努力したから、こんないい結果がでた。そうでなくて、そのことをして下さった神様がいますと信じる。どんな小さな事も大きな事も、それを備え、そのことを起こし、導かれるのは、人ではない。誰彼がそれを進めているのではなく、実は、見えない神様がそのことをしていて下さる。それなら、私の嫌な事をどうして神様はするのか。自分にとって、良いか悪いか。それが本当に役立つかどうか。大切かどうか。それは自分ですらもわからないのです。そうでしょう。明日の事もわかりません。新しい一年、どういう日々が備えられているのか。自分で計画した通りにやっていけるか。行けないのです。じゃあ、何がそれを妨げているのか。あの人が、この事があって、こういう問題があるから、上手くいかない。そうではなくて、一つ一つのことに神様がいます。神様が、そのことを起こしておられる。今年、思いがけない病気になるかもしれない。交通事故に遭うかもしれない。あるいは、自然災害が起こって、大洪水で家が流されるかもしれない。また、病気になる。私も経験がありますが、病気をすると、必ずどうしてこんな病気になったのだろう、何がいけなかったのだろう。過去からずっと振り返って、あの食事方法が悪かった。あそこで無理したからいけなかった。そうじゃない。神様がそこにおられるから、そのことが起こっている。6 節にありますように、「**神のいますこと**」というこの一言は、実に深い、広い。そしていろいろな事に当たって、ここに神様いますと信じること、

これが私たちの信仰であります。朝、目が覚めて、ちょっと調子が悪い。元気がない。頭が痛い。身体がだるい。どうしてだろう。考えてみて、「昨日、あんな無理な事をした。しなくていいことをした」。そのために節々が痛い。「あれが原因だったなあ」。確かに、直接的な原因はそこにあるかもしれませんが、しかし、そのことを起こしておられるのは神様です。そして神様は、その痛み、疲れを通して、今一度、私たちに何が今必要なのかを教えておられるのです。どんな小さなことも、そこに神様の意図がある。「神います」と信じていくのは、まさにその一つ一つのどんな事にも、神様が今私に教えようとすること、語ろうとして下さること、与えようとする恵み、いろいろなものがある。私はいつもそのことを覚えます。

思いがけない事態や事柄、その時は七転八倒、大慌てをします。そしてすべてがひとまず片付いた時、ふと振り返ってみる時、「静まって、我の神たるを知れ」(詩篇 46：10)とありますように、あの心配した、眠れない夜を過ごしたその事も、実は、神様がこういうことを私に教えて下さった。私がこういう事を学ぶために、与えられたことであった。振り返ってみると、あの悩みに遭ったからよかった。「詩篇」の記者がうたったように、「**苦しみにあったことは、わたしに良い事です。これによってわたしはあなたのおきてを学ぶことができました**」（詩篇 119：72）と感謝する。

「**信仰がなくては、神に喜ばれることはできない**」。その信仰は「神、我らと共にいます」。神様がすべてのことに存在しておられる。そこにおられる神様。神様は私たちに事を起こし、事を導き、その事の中を通して、あなたに語ろうとしていらっしゃる。あなたに知ってほしいと思っておられる。神様の大切なメッセージ、伝えたいことがあるのです。この年も、神様は何を私に語って下さいますか。起こってくる出来事が早く解決してほしい、過ぎ去ってほしいと願うばかりでなくて、「ここで、神様は私に何を語ろうとしておられるのか。この事を起こしておられる神様は、いったい私に何をさせようとするのでしょうか」。神様のいますことに常に心を向けていきたい。

その後にもう一つ。ご自身を求める者に報いて下さることです。報いて下さるとは、神様は生きておられるということです。神様は、今も生き、働いて下さる。いろいろな事に、きちんと神様がわざを進めて下さる。エリヤがアハブ王様の時代、アハブ王様がまことの神様を捨てて、バアルやアシラの神の偶像を拝むようになってしまった。神様は繰り返しアハブ王様に警告を与えますが、一向に聞こうとしない。その結果、イスラエルに三年にわたる飢きんを起こす。そのことを預言者エリヤに神様は伝えます。これから三年間、雨が一滴も降らない。そのことをアハブ王様に警告せよと言われ、エリヤは行きます。その時、最初に言ったのは、「**わたしの仕える万軍の主は生きておられます**」と、そう言ったのです。わたしの仕える万軍の主は生きておられる。

私たちの信じる神様は生きておられる。これが報いて下さるということ。神様は今も生きておられるのです。昼寝をしているのでもなければ、でくのぼうでもありません。今も絶えず私たちに目を留めておってくださる。そして生きて、働いて下さる。私たちの祈りに答えて、どんな事でもなし得たもうお方。生ける神。これを信じるのです。

私たちは神様に祈ります。祈って、必ず主は答えて下さる。そう信じること、これが今も、私たちに報いて下さる神であることを信じて行くことに他なりません。神様はいつも生き、働いて下さる。私たちに常に干渉しておられるのです。常に私たちの生活の中で、具体的に事を起こし、具体的に事を導いて、私たちに祈ることを求め、神様は私たちと交わりを持ちたい。だから、いろいろと干渉して下さる。私たちの信じる神様は今も生きておられる。そして報いて下さる。「伝道の書」の一番最後に、神様は善と悪とをともにさばかれると語られています。神様は私たちが何をしようと無関心というお方ではありません。する事、なす事、どれ一つ、どんな事も、神様はちゃんと見ていらっしゃる。生きておられますから、報い給うお方です。

ハガルが、女主人サライにいじめられて、荒野に逃げます。死のうと思ったのでしょう。その時、神様がハガルに声をかけた。「ハガルよ、お前、どうしたのか」。「女主人のもとから逃げ出しました」。その時に、神様は「お前の胎の実は、アブラハムの子供であるから、あなたの子供も、わたしは祝福する。だから、あなたはもう一度、女主人サライのもとへ帰れ」と言います。大変なことです。いじめられて、大変な目にあったその人の所へ、もう一度帰れと言われる。しかし、神様は、「大丈夫。わたしがあなたと共にいるから」。その時、彼女は「あなたはわが神、エル・ロイの神。私を見給う神です」と言います。「そうだった。神様、あなたが生きて、私と共にいて下さる。私を見て下さる。見守っていて下さるのだったら、たとえ、サライのもとで、どんな仕打ちを受け、扱いを受けようとも、神様は報いて下さる」。私たちの信じる神様は苦しみを知らない方ではありません。私たちの心まですべてを知り尽くしている。それに対してちゃんと応答して下さる。だから、イエス様は、「ペテロの第一の手紙」にあるように、「**ののしられても、ののしりかえさず、苦しめられても、おびやかすことをせず、正しいさばきをするかたに、いっさいをゆだねておられた**」（Ｉペテロ　2：23）と。神様は知っていらっしゃる。神様が必ずそれに答えて下さるのです。

だから、この一年も、嫌な事があり、辛いことがあって、「あいつがいかん、こいつがいかん」と、そんな事を思わないで、神様はご存じです。「主よ、私は今こんな苦しみの中にあることを、あなたはご存じですから、主よ、どうぞ、よろしくお願いします」と、生ける神に頼る。死んだ神ではない。形だけでも、言葉だけでもありません。神様は生ける神であ

ること、報いて下さる主でいらっしゃることを、決して忘れてはならない。そうしないと、つい自分でなんとかしよう、私が報復する。あんな事を言われたら、だまっておれない。そう言って、二倍も三倍もますますエスカレートする。そうじゃない。神様はご存じ。見ておられる。だから、恐れることはない。心配しなくてよい。必ず神様は、時を定め、事を導かれるお方です。

この年も、この信仰に固く立っていきたい。6節にありますように、「**信仰がなくては、神に喜ばれることはできない。なぜなら、神に来る者は、神のいますことと、ご自身を求める者に報いて下さることとを、必ず信じるはずだからである**」と。神様がいらっしゃる。その方は今も生ける神であり、私たちに報いて下さる方であります。このことを固く信じて、常にここに主がおられますと、絶えず自覚していきたい。神様がこの事をしておられる。主人が、家内が、この息子たちが原因ではない。神様が今、この事を起こしておられる。あの人があんなことを言うのは、神様が私に伝えたいことがあるから。だから、私たちはあまんじて、感謝して受ける。そして神様に祈り、時を待つ。神様は、必ずよき時をもって、報いて下さる。答えて下さる。応答して下さる。この生ける主に触れる一年でありたいと思います。

ご一緒にお祈りいたしましょう。